
魔法少女リリカルなのは 運命を変えし者

怪盗ネオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 運命を変えし者

【NNコード】

N5147Z

【作者名】

怪盗ネオン

【あらすじ】

世界のために生き世界に嫌われて死んだ。そして再び運命を変えるために力を行使する

プロローグ

「リリはビリなんでしょう?」

上下黒で統一され所々に赤のラインが入っている
肩甲骨あたりまで伸ばした赤みがかつた髪。右顔面には白い仮面。
左側は灰色をした瞳をした男
目の前には土下座をしている老人

「あの……」

「な、なんじや?」

「リリは一体どこなんですか?」

「リリは『天界』じゃよ」

「天界……つまり僕は死んだんですね?」

「その通りじゃよ。じゃからお主はここにいる

「やうですか……『フヒイ』」

僕の右指についている指輪が光り出す

僕のとなりに白い和服を着て腰まで伸ばした透き通った水色の髪に
エメラルドの色をした瞳をした女性が立っていました

「どうかしましたか?『アレン』」

「フュイ、僕はどうやら死んでしまったようです。さすがにあの人
数には敵いませんでしたがね」

「アレンは悪くありません！あれは組織がアレンを利用しようとして…！」

「結果はどうあれ僕は死にました。僕がいなくなつたことで組織は
空中分解するでしょうから結果オーライです」

「でもあなたは死んでしまつた。私がついていながら…。」

ペチン！

「…」

僕はフュイにてprocessorsをかました

フュイは涙目でお口をさすりながらこちらを睨んでくる
恐いどころか可愛いんだけどね

「お前は悪くない。だから気にしないでください」

「アレン…」

「ねつ」

「…（その笑顔は反則ですよー）は、はい／＼／＼

「（どうして顔が赤いのでしょうか？風邪でも引いたのでしょうか？
でも今はそれより）あなたは何者ですか？」

僕は目の前にいる老人を見据える
フェイも少しうま赤いが老人を見る

「わしは『神』じゃ」

「フェイ、この人を病院に連れていきますよ。まだ間に合はず」
「いえアレン、もう手遅れです。それよりは邪を滅したほうがいい
のでは？」

「いやわし本物ね！全知全能の神じやから！」

「証拠はありますか？」

「これを見てみよ！」

そう言って差し出されたのは一枚の紙

「これは…まあなんとなく納得はしました。これを見せられれば、
ね」

「それでその神様が私たちに何のようじょつか？」

神は懐から何かを取り出した

「それは？」

「お主らアーネは見たことはあるかの？」

DVDだった。タイトルは魔法少女リリカルなのは

「いえ、そんなものとは全くの無縁でしたので」

「わづか……実はお主にこのアニメに出てくる少女たちの運命を変えて欲しいんじゃよ」

「……僕は運命を変える者、『トステイニーーブレイカー』だ。誰も不幸にさせたくない」

「アレン……」

「下されでくれるかの？」

「ええ。喜んでお引き受けいたしましょう」

「なり特典を三つまで下さよ」

「別にそんなものはいりませんよ。この力があれば事足ります」

「わづか……」

「今まで特典を下されたかったのでしょうか？」

「なら一つ。向ひで動くために家と資金を」

「その」とは関してはすでに用意はできており。金は関しても一生困らない量を用意した

「太っ腹ですね」

「頼む方なんですか？」
「へりは当たり前です」

「なら特典は後々決めるところ」といいでしまうか？」

「それでも構わん」

「フヨイ、向こうでも頼みますよ」

「はい！アレン！」

「ではよい旅を祈つておるぞ！」

そして僕たちの足元に黒い穴が現れた

「キヤアアアアアアアア！」

「糞神憶えていてくださいね？」

僕は殺氣を込めた黒い笑みを神に向けた

最後に見たのは僕を見て顔を青くしてブルブル震えていた神だった

プロローグ（後書き）

感想など待つてまーす！

第一話

「どうやら僕は縮んでしまったようですね」

そう、僕の身長が5～6歳ぐらいまで縮んでいたのです。髪はそのままですがこの身長ではさすがに長いと思います。服も身長に合わせて小さくしただけのようですね。ですが、仮面は付いていなかった

焦りましたが、フロイドが言つには普通のようでした。まあそのことは置いといて顔もそこまで変わつていませんがさすがに変えてもらつたほうがよかつたでしょうか？前なんか僕は男だといつの間に男が群がつてきて苦労しました

僕たちは現在マンションの一室の前にいる表札には僕とフレイの名前がありました。ちなみにフロイドの姿は変わつていませんよ？

あとこの姿を見たときフロイドが僕を弄り回したのは別の話

「リリが僕たちの家ですか……」

そう言つて僕はドアを開けて中にはいる中は一通りの家具と電化製品がありました

「綺麗なところですね」

「はい。私はアレンがいればそれだけで充分ですが、リリのところも悪くはないですね」

「ありがとうございます。とりあえず荷物の整理でもしましょつか？」

「やつですね」

数分後

「僕たちの『籍もあるんですか』

「しかも私はアレンの姉という設定のやつですね（私がアレンの姉…キヤアアアアアアア…）」

（いつたいどうしたんでしょうか？体をクネクネとさせて…）

僕はなんか面白そつだからそんなフェイをずっと見ていました

数分後

「みつともない所を見せてしました／＼／＼

ようやく我に戻りフェイは焦っていた

「いいですよ。僕も面白いものが見られましたから（それに記録もしましましね）」

「消してくださいよ／＼／＼！」

「なぜ分かつたんですか！？それにこんな面白いものを消すなんてもつたといいじゃないですか！」

「アレンはうなんですか！？鬼畜なんですか！？いや…それもいいかも（ボソッ」

「なんかすごい寒気がするのですが気のせいでしょうか？それとフェイが危ない扉を開けようとしているような気がするんですが！？」

「アレン！私をもつとこじめてください！」

「うわあ！フェイが壊れてしましました！」

またさらに数分後

「ハア…ハア…、落ち着きましたか？」

「私は一体何をしていたんですか？記憶が曖昧で…」

「もういいです。それよりそろそろ夕食ここましちゃう。何か食べたいものはありますか？」

「いいのですか？アレン」

「ぼくが作ったぼうがいいでしょ。それにこれは私の趣味です」「…わかりました。ではお任せします」

「なら食材を買ってこなくてはなりませんね。あの糞神が金は大丈夫だとはいっていましたが…」

そつ言つて僕は置かれてある通帳を見た
それを見た僕は目を丸くした
フェイも覗いてきた

「これって兆を超えていませんか！？」アレンー

「これなら一生働かなくても食つていけますね

そこまである大金を僕に渡したのですか

驚きを通り越して呆れますね

「では買ひに行つてきますか。どうしますか？フロイも一緒に来ますか？」

「いえ、私は荷物の整理をするので

「さうですか。では行つてきます

そして僕はマンションを出た

買い物を終えると、すっかり暗くなつていきました

「結構冷えますね。早く帰らなくひきも待ちへたびれていますかから…んっ？」

公園の前を通り一人の少女が座っていました

僕は氣になり近づきました

「どうしたんですか？」

「ふえ？」

少女の目は赤くなつていました。泣いていたのですか…

「もう子供は帰る時間ですが…」

「グスッ…なのははひひとりでもへいきなの。それにかえつてもだれもなのははとあそんでくれないの」

なにかあつたんでしょうか？

それになのはつて…何か忘れているよつた氣がします

「何があつたんですか？」

「えつと…」

「…」
そして僕はどうしてこの泣いていたのかを聞きました
この子の父親が大怪我をして家族が忙しくなり遊んでくれずにいた
ことを

「あなたのお父さんは生きていらぬのでしょうか？」

「うん」

「なら希望を捨てちゃダメです。その希望にすがりつきました。そ
れに家族もあなたを思つてゐるはずです」

「そうなの？」

「当たり前です。それが家族というものです。あなたもあなたの気持ちを伝えなさい。人は言葉でなくては自分の気持ちを伝えられないですから」

「うん！わかつたなの！」

「フフッ、とても素敵な笑顔ですね（一二コッ）」

「いやつ／／／！？（そのえがおはほんそくなの～！）」

（どうしたんだ？ 毎回思うのですが僕が笑うとみんな顔を赤くして顔をそらしますが、僕の笑顔って気持ち悪いのでしょうか？）

「そんな」となこの一・あなたのえがおはともすしてわなの一・つ・はう／＼／＼

僕の心を読んだ上にまた顔を赤くした！

「もう暗いですから送りますよ」

「えつ？いいの？」

「こんな時間に子供が一人で出歩くわけにはいかないですからね」

「むう～」

「行きませじょうか？」

僕は手を差し出す

「つさー。」

彼女も僕の手を取る

「ねえ、ひとつこいつ。」

「いいですよ。子供は今が甘えじきですかうね

「むう～、あなたもいじもなのー。」

「せつこえ、今は僕は子供でしたね

「えつ？」

「いえこひらの話です。それで?なんですか？」

「わたしとおだちになつてほしのー。」

「ええ。構いませんよ?あ～そつこえば名前を教えていませんでし
たね。僕はアレンと申します」

「わたしはたかまちなのほなのー。よひくねー。アレンちゃんー。」

「よひくね願こします。あと一つ書いておきまへじょひよ。」

「?」

「僕は男ですよ？」

そして僕は耳を塞ぐ

「ふええええええええええええええええ！」

なのはの声が塞いでしる耳によく響いてくる
久しぶりですね。前の世界でもよく言われたもんですし

「では行きますか！」

「うん！」

そう言って僕とのはは他愛もない話をしながら歩いていた

「くえアレンくん、つじやいきんじゅかにひつじしてきたんだ」

「お、あのダンジョンですか？」

そう言って僕は指を指した

「どうなんですか?」

「こんどあそびにいつていいく!?」

「いいですよ」

「やべやべなー。」

「はー。あー、じーですか?」

喫茶店翠屋

この子の親は喫茶店をやっているのか

「じーからば僕は邪魔になる。帰らせてもらひつま

「うんーおかあさんとおじいちゃんとおねえちゃんとおはなしする
のー。」

「頑張つてくださいー。」

「うそー。」

そう言つて僕はその場を後にした

「あつ思つ出した。なのはつてあの糞神が持つてたDVDのタイト
ルにあつた」

帰り道で思つ出したアレン

家に帰るとフロイドが泣きながら心配していいたので謝りました
料理を作つてフロイドが食べたところによると

「もつあなたはコックになつたまつがいいのではないでしょうか?
これなら世界のトップに立てると思いますが

と、かなりの高評価をもらつました

第一話（後書き）

感想や意見を送つてもうれると作者は喜びます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147z/>

魔法少女リリカルなのは 運命を変えし者

2011年12月17日19時45分発行